

国史跡指定記念 古代史トークセッション in 筑紫野

歴史探鼎談

（朝まで語りたい前畑遺跡）

令和7年(2025)

11/3 (月・祝)

13:30~16:30



筑紫野市教育委員会

歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

国史跡指定記念 古代史トークセッション in 筑紫野

歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

令和7年(2025)11月3日(月・祝) 13:30～16:30

筑紫野市生涯学習センター さんあいホール

プログラム

13:00～13:30 開場・受付

13:30～13:35 開会行事

第一部

13:40～14:10 調査報告

「前畑遺跡の土塁状遺構」

小鹿野 亮（筑紫野市歴史博物館長 / 筑紫野市教育委員会 文化財課長）

14:10～14:50 特別講演 1

「東アジアのなかの前畑遺跡」

亀田 修一（岡山理科大学名誉教授）

14:50～15:30 特別講演 2

「古代大宰府と前畑遺跡」

佐藤 信（東京大学名誉教授）

15:30～15:40 （休憩）

第二部

15:40～16:20 古代史トークセッション

佐藤 信（談長）× 亀田 修一（副談長）× 小鹿野 亮（談員）

古代史の佐藤信先生、考古学の亀田修一先生、そして小鹿野亮の3人による古代史スペシャル・クロストークセッション。

これまでの研究に前畑遺跡の成果を新たに加えることで、古代の大宰府から見えてくる日本古代史を深掘りします。

16:20～16:30 閉会行事

[表紙・裏表紙写真] 前畑遺跡 土塁状遺構の層状積み土（版築）



ごあいさつ

国史跡指定記念 古代史トークセッション in 筑紫野「歴史探鼎談～朝まで語りたい前畑遺跡～」の開催にあたりまして、ご挨拶を申し上げます。

本日、特別講演をお願いし、ご快諾いただきました佐藤信先生、亀田修一先生には、ご多用のなかをご講演を賜りましたこと篤く御礼を申し上げます。

古代の大宰府は、西海道（九州）の支配と内外からの使節の送迎、海边防備を担っていましたが、その始まりは、天智天皇2年（663）の白村江の敗戦後に、防人を置き、烽火を設置し、平野を遮断する水城や小水城の防塁を築き、また、大野城や基肄城など古代山城の築城によっています。それらは、戦略的な意図を持った防衛の拠点でもあり、前畑遺跡で発見された土塁状遺構は、これらのダイナミックな古代史の歴史背景と連動する遺跡である可能性を秘めているものと考えられています。

前畑遺跡の土塁状遺構は、平成27年（2015）に、筑紫野市大字筑紫・若江の丘陵上で発見されました。土塁状遺構は、大宰府をとりまく山々の一角、大宰府から南東方向の丘陵上にあり、自然の尾根地形を上手に利用しながら、全長558m以上にわたって造られた極めて大規模な土木構造物です。このことは、その規模からみても国の関与を示すもので、水城や小水城、大野城・基肄城・阿志岐山城などの古代山城と連動し、一体的に機能したものと考えられ、大宰府の外郭線（境界）を想定するきっかけとなりました。それらの調査研究は、領域的な拡がりをもって急速に進んだ感があり、そのことを決定づけたのが前畑遺跡の発見でありました。

そのため、古代の大宰府に深く関わる重要な遺跡として、国の文化審議会（令和6年12月20日開催）から、文部科学大臣に対して答申がなされ、令和7年3月10日の官報告示によって、国指定史跡となったのです。

最後になりますが、遺跡の発掘調査にはじまり、その保存や国史跡指定に際し、地権者をはじめとする関係者の皆様方に対し深く感謝と御礼を申し上げるとともに、これを契機として、遺跡の保存・整備・活用に向けた第一歩を踏み出してまいりたいと考えております。

令和7年11月3日

筑紫野市長 平井 一三



講師プロフィール



さとう まこと

佐藤 信（東京大学名誉教授・博士（文学））

くまもと文学・歴史館長
横浜市歴史博物館長

1952年東京都生まれ。1976年東京大学文学部卒業、1978年東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。1979年奈良国立文化財研究所研究員、1985年文化庁文化財調査官。後に、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、1996年東京大学大学院人文社会系研究科教授。2018年東京大学を定年退職して、東京大学名誉教授、人間文化研究機構理事（～2020年）となる。2021年からはくまもと文学・歴史館長、横浜市歴史博物館長も務めており、福岡県では大宰府史跡調査研究指導委員会や鴻臚館跡整備検討委員会の委員長などを歴任している。

専門は日本古代史。奈良文化財研究所時代には、木簡研究や古代遺跡の調査にも従事したことから、文献史料だけでなく、埋蔵文化財の調査やその保護に関する造詣が深い。著書に、『日本古代の歴史6列島の古代』吉川弘文館（2019年）。『大学の日本史①古代』山川出版社（2016年）。『古代史講義』ちくま新書（2018年）。『世界遺産宗像・沖ノ島 みえてきた「神宿る島」の実像』吉川弘文館（2024年）などがある。

かめだ しゅういち

亀田 修一（岡山理科大学名誉教授・博士（文学））



1953年福岡県生まれ。1976年九州大学文学部卒業。1980年九州大学大学院文学研究科修士課程考古学専攻修了。同年岡山理科大学助手として就職後、講師、助教授を経て2001年から同大学教授となる。特任教授を経て現職。専門は考古学で、主な研究対象は、古代山城、渡来人、古代寺院、古代瓦、須恵器など、特に東アジア考古学に関する造詣が深く、大宰府史跡調査研究指導委員会の委員も務めている。編著書に、『考古資料大観 第3巻 弥生・古墳時代 土器Ⅲ』小学館（2003年、編著）、『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館（2006年、単著）、『吉備の古代寺院』吉備人出版（2006年、湊哲夫氏と共著）、『古墳時代研究の現状と課題（上・下）』同成社（2012年、土生田純之氏と共編著）、『講座 考古学と関連科学』雄山閣（2022年、白石純氏と共編著）などがある。

おがの あきら

小鹿野 亮（筑紫野市歴史博物館長・筑紫野市教育委員会文化財課長）

1970年埼玉県生まれ。1992年別府大学文学部史学科考古学専攻卒業。1993年筑紫野市役所に入庁して、現在に至る。これまでに、2016年九州大学工学部非常勤講師、2018～2020年交通史学会常任委員。2019～2020年に奈良県立万葉文化館共同研究「万葉集の作歌をめぐる都市交通史的研究」の研究代表者を務めている。専門は考古学だが、歴史地理学的な研究も多い。主な論文・著作に、「入唐求道巡礼行記一山越えの軍用道・始皇帝の直道を歩くー」『古代東アジアの道路と交通』（鈴木靖民・荒井秀規編）勉誠出版（2011年）、『万葉考古学』（上野誠編・共著）角川選書（2022年）、「古代大宰府の空間的世界ー古代交通と大宰府の内と外ー」『古事記年報』第65号（2023年）などがある。



前畑遺跡の土塁状遺構

小鹿野 亮

1. 国史跡 前畑遺跡の誕生

平成 27 年（2015）に筑紫野市大字筑紫・若江で発見された前畑遺跡の「土塁状遺構」は、古代の大宰府外郭に深く関わる重要な遺跡であることから、令和 7 年 3 月 10 日に国史跡となった。

土塁状遺構は、大宰府をとりまく山々の一角、大宰府から南東方向の丘陵上にあり、自然の尾根を上手に利用しながら、全長 558m 以上にわたって造られた極めて大規模な土木構造物であった。これまでに見つかっていた平地を遮断する水城や小水城とは異なり、これまでに類例がない丘陵上で発見されたことが特徴であり、水城や小水城、大野城・基肄城・阿志岐山城などの古代山城とともに機能したものと考えられ、大宰府の外郭線（境界）を想定するきっかけとなった。

2. 高度な土木技術の選択

前畑遺跡の土塁状遺構は、7 世紀中頃～9 世紀後半頃にかけて機能した大規模な土木構造物であることが調査によって分かった。それと同時に、従来考えられていたよりも、多様な土木技術が駆使されていることが判明し、その技術は、地形や地質などによって選択されていたことが分かってきた。

例えば、版築と呼ばれる「極めて薄い水平連続横積層」であっても、花崗岩由来の礫を混ぜており、地層の上面が波打っている部分や、なかには積層が水平ではなく斜行している部分も見られた。また、土塁状遺構の内部に土堤状の隔壁をつくり、その間を粘質土による盛り土を行っている部分もあった。軟らかい地層と硬い地層もみられ、土塁状遺構の全体を硬化させずに硬軟を織り交ぜたバランス工法が採用されている点は、これまでの版築工法の概念を大きく変えることになった。

その技術は、韓国の華城吉城里土城、百済の最後の王都である扶余泗沘都城の東羅城などにも共通するもので、わが国へのその技術の伝わり方をはじめ、今後の古代山城などの土木構造物の調査研究について、その進展に重要な意味を持つ鍵となる遺跡であることが評価されている。

前畑遺跡第 13 次調査の土塁状遺構（横断・第 1 トレンチ）では、その横断形状は、二段築成で下段の西辺には犬走り状の平坦面を持つ形状をなしている。土塁状遺構を構成する地



前畑遺跡第13次調査第1トレンチの土塁状遺構（横断）



丘陵の尾根を緩やかに蛇行しながら、土塁状遺構が伸びている様子が分かる。南の最高所（標高約72m）から北の丘陵まで頂部（ピーク）と浅い鞍部が連続しながら緩やかに平野部へ下降し、平野部との比高差は約46mである。土塁状遺構は丘陵尾根線の頂部を避けて、地形に合わせて、自然の地形と一体となって築造されている。土塁状遺構を構成する地層は、186層に及んでおり、残存幅15.58m・高さ3.55mの規模を有している。

大宰府の南東、福岡県筑紫野市の前畑遺跡。土塁状遺構は、平地にある水城や小水城とは異なり、これまでに類例がない丘陵上で発見されたことが特徴です。

土塁状遺構は、全てを連続した帯状の人工的な盛り土で造るのではなく、自然地形の尾根を土塁に見立てて土木工事を行わない区間があり、他にも部分的に施工する区間や、全てを盛り土で施工する区間がみられます。このため、丘陵の高いところに対しては、土塁状遺構を少し蛇行させて、アップダウンを避けてくねくねと屈曲して伸びていきます。これは、高低差に対して最小限の土木工事とするためで、できるだけ水平を保ち、最短距離を指向しているものと考えられます。

これは、古代の山道などの施工にも共通する要素で、最も合理的な場所を選択していることが分かります。

土塁状遺構の地形による施工差



① 非施工区間

丘陵の頂部（ピーク）では、地形の高低差を避け、盛り土施工を行わない。



② 準施工区間

ピークへ遡上する傾斜地形では、自然の地形を利用し、部分的に施工される。



③ 全施工区間

谷鞍部、ピークとピーク間のやせた尾根には、地形全体を盛り足して土塁状遺構を作出する。

- これらの施工方法に優劣はなく、地形や傾斜によって使い分けられている。
- 帯状の空間を作出しているが、全区間を施工していないことから、断続的。



確認調査E地点第11トレンチの土堤状積み土

第10トレンチと同じく、層状の積み土による土堤状の隔壁を複数箇所につくり、その間を花崗岩風化土（真砂）・褐色粘質土・黒褐色土、シルト（極微細砂）を用いて盛り土している。軟らかい地層と硬い地層がみられ、硬い部分の支持強度は1㎡当たり14.17～23.53kgで、全体を硬化させずに硬軟を織り交ぜたバランス工法が採用されている。



層は 186 層にも及び、砂・粘性土・シルト（極微細砂）を交互に選択的に用い、一層が 1 cm 程のとても薄い地層堆積をなしていた。様々な土壌を使い分けて土塁状遺構を積み上げ、残存幅 15.58m・高さ 3.55m の規模であった。

また、確認調査 E 地点（4 トレンチ方面を望む）では、北に接する丘陵頂部に至るやせた尾根、東西から迫る急峻な谷の鞍部にあり、土塁状遺構の横断面形状は、中心線から東方が急傾斜、西方には一旦犬走り状の平坦面を設けた緩斜面となっており、下端幅 14.3m・全体高 3.9 m の規模であった。地層は、一見すると横方向の水平な連続した層群に見えるが、層状積み土ではあるものの不連続な小単位のユニットを土塁状遺構の横（東西）方向に対してジグザグに移動を繰り返しながら、積み増しを行っている。全体を一度に積み上げるのではなく、地層の塊を交互にずらしながら全体的に盛り上げている。

土だけで盛り土を行うためには、崩れないように積んでいく工夫が必要である。これまでに、水城や古代山城の土塁などでは、「版築工法」と呼ばれる板囲いした枠のなかに土や砂を交互に入れてコツコツと叩き締めて、地層を均一に積んでいく方法が教科書的な解釈であったが、前畑遺跡の土塁状遺構は、単純な版築工法だけではなく、多様で高度な土木技術が古代に存在していることを示している。古代山城の土塁や水城・小水城などの築堤にも、花崗岩由来の礫の意図的な混入、水で混ぜたような地層の乱れ、地層どうしが波打っていたり、黒褐色土の塊状の盛り土など、前畑遺跡に共通する要素が再確認されており、古代の土木構造物の技術を再検討する必要も生まれている。

3. 前畑遺跡をとりまく大宰府関連遺跡と空間意識

前畑遺跡の土塁状遺構の発見は、従来、私たちが考えていたよりも遙かに広い大宰府の空間をとらえることにつながっていった。

その一方で、成立期の大宰府を取り囲む水城、大野城、基肄城、阿志岐山城がその外郭を形成し、山々がその空間を規定していったことで、「囲む」ということと「北が上」という固定概念があったことも事実である。

そこで、方向を変えて「視点ずらし」で大宰府を鳥瞰してみよう。例えば、海域（博多湾）と陸域（大宰府）とをつなぐ線を中心にイメージを回転して考えてみると、大宰府に至るその二日市地峡帯の最奥部に水城が築造されていることが分かる。また、その西方には小水城群によって遮蔽される防御線があり、水城の西方に八つ手状に広がる丘陵の谷筋を閉塞している。現状では、昭和 4 年（1929）に発見された大土居・天神山・上大利の各小水城と、その他にも小倉・春日の谷筋に推定されており、最終的には水城の内側、太宰府市大佐野の東西に伸びる狭い平地へと連なっている。この平地の東方は、大宰府の中心部へと直結する西からの位置



歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

関係にあることから、外敵の侵入に対する水城との補完関係を考えれば、地形的にはその防御上、必ず遮断する必要性がある。

一方でその東翼には、志賀島や奥博多湾から糟屋郡の郡域を経て大野城に至っている。糟屋郡内では、交通関連遺跡の調査が進展し、糟屋評家・郡家と考えられる阿恵官衙遺跡をはじめ夷守駅家と考えられる内橋坪見遺跡、山陽道の遺構、山陽道を分岐して糟屋郡内を抜けて御笠郡に至る古代官道などが発見されている。糟屋郡で山陽道から分岐し、南下して大野城の東麓を通過する古代道は、糟屋郡家・夷守駅家から宇美八幡宮を直線的に通過して、大野城の正面景観である北東麓を望みつつ、蘆城駅家（御笠地区遺跡 A 地点が推定地）、阿志岐山城に至っている。蘆城駅家は、瀬戸内海へ通じる豊前道の大宰府からの最初の駅家でもあることから、蘆城も夷守も衝状をなしていることになる。この夷守駅家～蘆城駅家間の太宰府市一字美町の行政界付近には、「只越（ただごえ）」と呼んでいる峠があって、現在でも主要道がこの峠を最短距離で結んでいる。

また、さらにその外周には、東翼に三郡山系、西翼に脊振山系が肥前国松浦郡付近にまで自然の壁として存在しており、海域から見た大宰府を守っているのである。そのような視点でみると、海路からの侵入経路を古代山城などの配置と併せて考えてみる必要があるように思われる。倭国侵攻の「橋頭堡」（敵地での不利な地理的な条件で、戦闘を有利に運ぶための侵攻拠点で、兵站（ロジスティックス）確保の前線基地）を逆に防御する側からの視点である。おそらく、正攻法なのは対馬（金田城）から博多湾への侵攻ルートが正攻法であり、その次に唐津湾（肥前松浦郡）へ侵攻してくるのが、歴史的事象を見ても明らかである。

また、対馬海流の流向を考慮しなければならないが、西九州方面からの侵攻ルートも想定される。従前では、有明海への侵攻が想定されていたが、その場合は海路を反時計回りに大迂回することになり、むしろ、五島列島（小値賀島・宇久島）～平戸島経由、佐世保湾辺りへの侵攻が最短経路となる。陸路を佐賀平野へ侵入した場合、肥前国側にはおつぼ山城・帯隈山城があり、とくにおつぼ山城は唐津湾からも陸路でのアクセスが容易である。筑後川を挟んだ対岸には高良山城があり、筑紫平野（筑後平野・佐賀平野）最奥部に基肄城が存在していることになる。遺構としての連続性については、詳らかにはし難いものの、基肄城の麓の狭隘地を小水城（関屋土塁・とうれぎ土塁）で塞ぎ、その先に前畑遺跡があるという位置関係になり、土塁状遺構の性格を防御壁という位置付けだけで評価することは難しいものの、その海域を指向した広域的な立地については、符合的な位置関係にあることは、看過できない。

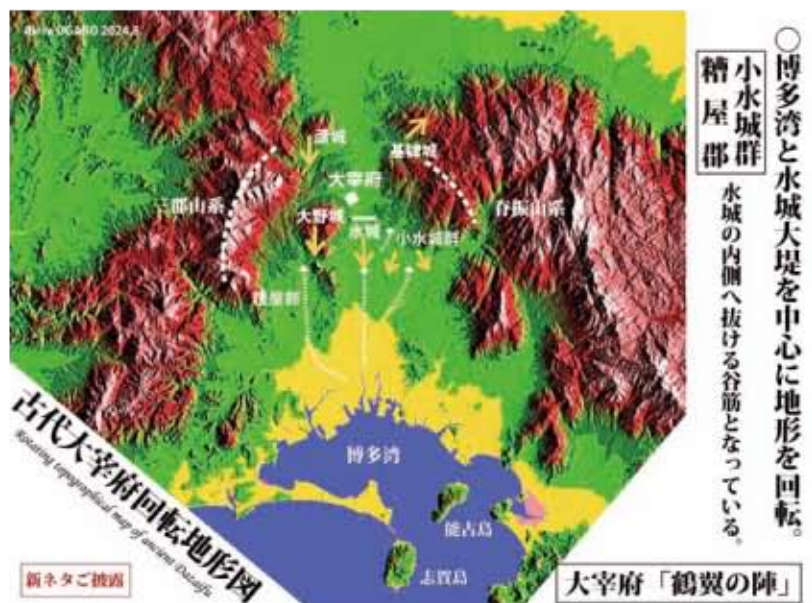


国史跡指定記念 古代史トークセッション in 筑紫野 歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～



確認調査Ⅱ地点第Ⅳトレンチ
の土壇状遺構（東から）

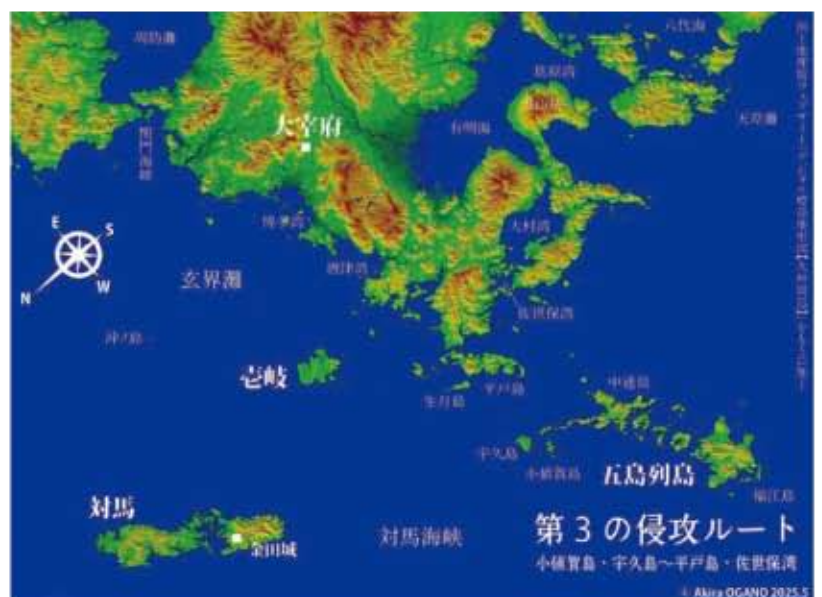
下端幅 14.3m・全体高 3.9mの規模で、地層は、一見すると横方向の水平な連続した層層に見えるが、小単位のユニットを東西方向に対してジグザグに移動しながら、積み増しを行っている。



○博多湾と水城大堤を中心に地形を回転。
糟屋郡 水城の内側へ抜ける谷筋となっている。

新ネタご披露

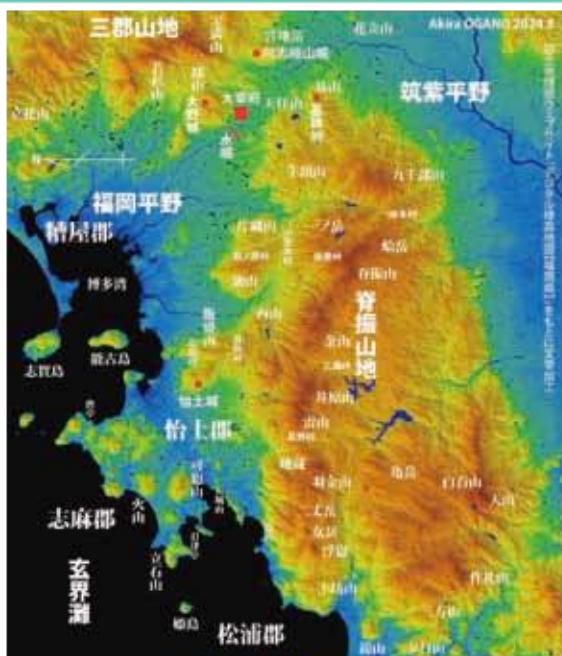
大宰府「鶴翼の陣」



第3の侵攻ルート
小幡賀島・宇久島・平戸島・佐世保湾

© Akira OGANO 2025.5

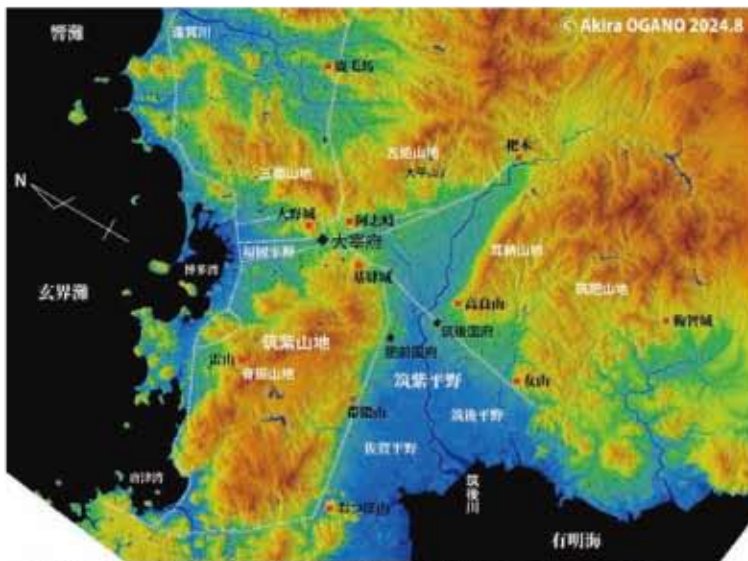




新ネタご披露

【視線ずらし】西から斜め見した大宰府

北部九州の出入り口は、「松浦郷」を外して考えることは出来ませんが、海路から考えてみます。伯土城は、あるべくしてそこにあるような気がしてしまっている感じがします。天平勝宝8(756)年・神護景雲2(768)年大宰大式「吉備真備」が伯土城築城等当官を務めています。大宰府防衛のための「造船」「国境守備」「防人」「百姓の募め」「行軍式」「諸島発八陣」「孫子の九地」「西海道節度使」などのキーワードが並んでいます。さすがは軍事の天才、吉備真備です。



新半タご披露

西から古代山城と有明海を考える

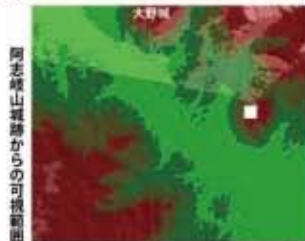
場合と、直接的に有明海から侵入する場合は想像できます。

筑後川を挟んで両岸に筑後と肥前の国府があり、古代山城もバランスよく配置されている感じがします。そうしますと、有明海側からの侵攻も想定されているような気がします。古代山城の研究には、「海」への指向が大切な意識です。



阿志岐山城 築城のコンセプトライン

新ネタご披露



東アジアのなかの前畑遺跡

亀田 修一

1. はじめに

筑紫野市前畑遺跡の「土塁状遺構」は、2015年に発掘調査され、その後、追加調査が行われ、確認できた長さ、構築方法、位置、そして出土土器などから古代の大宰府に関連する土塁ではないかと推測された。そして2025年3月10日に国指定史跡に指定された。

今回のトークセッションで亀田に与えられたテーマは、「東アジアのなかの前畑遺跡」で、古代大宰府の外郭線の一部をなすと推測されている前畑遺跡の土塁について東アジア、おもに朝鮮半島の例との比較・検討を行ってみたい。

なお、小稿では基本的に「大宰府羅城」ではなく、「大宰府外郭線」という用語を使用している。九州歴史資料館を中心に調査検討され、刊行された九州歴史資料館2023『大宰府外郭線Ⅰ』の成果によっている。また、大宰府の外郭線に関連する水城大堤、小水城群、大野城跡、基肄城跡、とうれぎ土塁、関屋土塁、そして前畑遺跡、阿志岐山城跡などを含めて、小稿では大宰府外郭線関連遺跡群と呼んでおく。

2. 前畑遺跡の概要（図1）（小鹿野ほか2017、筑紫野市2020・2021）

前畑遺跡は、福岡県筑紫野市大字筑紫・若江に位置する。2015年から2021年までの発掘調査によって、総延長558m以上に渡って築かれた「土塁状遺構」であること、出土遺物から7世紀中ごろから9世紀後半にかけて築造・使用された構造物であること、場所に応じた地山整形、層状積み・土塊積みなど多様な土木技術を採用していること、その技術が朝鮮半島の土塁構築技法とも共通する要素を含むことなどが明らかにされた。

そして、上記の特徴と検出されたその位置、つまり、大宰府政庁跡を挟んで北側・博多湾側の水城跡などの南側・反対側に位置することから、古代大宰府に関連して築かれた大規模土木構築物であり、大宰府を取り巻く大野城や基肄城や水城などの7世紀後半に築かれた防衛拠点と一体的に機能した大宰府の外郭線の南側の一部ではないかと考えられたのである。

3. 中国・朝鮮半島の古代の羅城・外郭線

日本列島には基本的に都市を囲む城壁、いわゆる中国の羅城に類するものは戦国時代の北条氏の小田原城、豊臣秀吉の大坂城の総構え、そして京都の御土居など僅かしか知られていない。

（1）中国（図2）

中国の羅城は、一般的に王宮が王都の北側にあり、その南側や周辺に碁盤目の道路が走り、そこに王族や貴族や一般の人々が生活し、その外側を方形に城壁が囲む姿をイメージすること



歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

が多いと思われる。

このような直線による方形の城壁を持つ例は、中国の北部、黄河流域周辺地域の平地（平原）に築かれた都城、長安や洛陽の都が代表的である。直線・方形を基本とした日本列島の平城京はすでに述べられているように唐の都長安がそのモデルと考えられている。

ただ、中国の南部、長江流域地域では、筆者の不勉強にも拠るかもしれないが、黄河流域地域の直線・方形を基本とした城壁・外郭線を持つ都城は探し出せず、図 2-2 のような周辺の山などを繋いだ南朝の建康城（南京）を見ることができる。このような自然地形の山などを繋いだ外郭線の詳細についてはいまだ十分な発掘調査はなされておらず、今後の調査・検討に期待したいが、この建康城の外郭線（羅城）が、朝鮮半島の百済泗沘（扶余）羅城のルーツではないかと古くから指摘されている（秋山 1984 など）。

つまり、中国の都城の羅城・外郭線も周辺の自然地形に制約を受けながら形作られたものが多くあったと推測される。

(2) 朝鮮半島（図 2-4、図 3）

朝鮮半島の羅城については、高句麗後期平壤（長安）城（586～668 年）と百済泗沘（扶余）都城（538～660 年）が羅城・外郭線を持っている（田中 2011）。

高句麗平壤城は現在の平壤（ピョンヤン）市に位置し、『三国史記』長寿王 15 年（427）条に「都を平壤に移す」とあり、清岩里土城が王城とされている。その後、『三国史記』陽原王 8 年（552）条に「長安城を築く」、平原王 28 年（586）に「都を長安城に移す」とある。この長安城は清岩里土城のすぐ南西側の現在の平壤の中心域に位置し、東・南側に位置する大同江の流れに沿いながら、城壁を築いている。城周は約 23 km と大きく、北から北城、内城、中城、外城に区分され、内城が中枢部で、外城に方形地割が施されている。外形的には中国北方の直線・方形の都ではなく、中国南朝の自然地形に沿った南京建康城の曲線形態に近いようである。

百済泗沘（扶余）都城は、『三国史記』聖王 16 年（538）条に、「都を泗沘に移し、国を南扶余と号す」とあり、熊津（忠清南道公州市）から南約 30 km の現在の忠清南道扶余邑の地に遷都したことが記されている。都の中枢部は公州を通して南流する錦江が北東から西に、そして南東方向に大きく湾曲して流れる平野部に築かれた。北側に標高約 105m の扶蘇山に築かれた城周約 2200m の扶蘇山城があり、そこから東に小型の青山城を経て、陵山里古墳群の西の山を経て、南の山に南下する羅城が築かれている。扶蘇山城から西側に関しては、近年の調査では、羅城はなかったとの考えが有力（朴淳發 2011）であるが、全くなかったのかいまだ決定的ではない。

王宮は扶蘇山城の南の山麓部に位置し、その南側に、明確な方形区画ではないが、東西南北に通る道が確認されている。そして、その中に定林寺などの寺院が建立されている。



4. 前畑遺跡と百済の羅城・外郭線

大宰府の外郭線については、古くから百済の泗沘（扶余）羅城との関係が述べられている（鏡山 1968）。筆者も基本的には同様に考えている（亀田 2023）が、当然、細部では違いも見られる。

例えば、泗沘羅城など朝鮮半島の土塁で見ることができる「版築」については、水城大堤や大野城跡の土塁では、「いわゆるきれいな版築」を見ることができるが、前畑遺跡では部分的な層状積み土はあるが、泗沘羅城のような明確な版築土塁はない。小水城の春日市域の大土居水城跡や天神山水城跡でも部分的に層状積み土は見ることにはできるが、水城大堤に比べると厳密な意味では違いがあり、そして、前畑遺跡や大土居水城跡や天神山水城跡では土塊積み（表土ブロック）が見られる（図 1-3）。このような土塊積みは朝鮮半島の三国時代の池の堤などで見ることにはできる（大阪府立狭山池博物館 2021）が、泗沘羅城ではよくわかっていない。

また、このようないわゆる版築土塁をやや湿地状のところで積み上げる場合、泗沘羅城では「敷粗朶工法」と呼ばれる土層と土層の間に葉っぱのついた木の枝を挟んで土塁を積み上げる工法が使用されており（図 3-4）、大宰府の水城大堤でもその使用が確認され、両遺跡の関係が述べられることが多い。ただ、この工法は今述べたように湿地状のところでよく使用されており、丘陵上に土塁を築く前畑遺跡の場合は、立地が異なるためにその使用がないということもできる。

さらに、泗沘羅城では土塁の前面に裏込めを持つ石垣が確認されている（図 3-3）が、大宰府外郭線では基本的に土塁前面に裏込めをもつ石垣はないようである。前畑遺跡でも裏込めをもつ石垣は確認されていない。そして、泗沘羅城では雉城（横長型）（図 3-5）が 3 カ所確認されており、大野城跡でその可能性があるものが指摘されているが、現時点では詳細不明である。

このように大宰府外郭線と泗沘羅城には類似点と相違点があり、前畑遺跡の土塁状遺構については泗沘羅城との直接的な関わりはよくわからないが、大宰府外郭線の水城大堤、大野城跡、基肄城跡、そして小水城群とは共通点もあり、相違点もある。そして、このような大宰府外郭線関連遺跡群と前畑遺跡土塁状遺構の共通点と相違点をどのようにとらえるかが、前畑遺跡土塁状遺構の意味を考えるポイントと考えている。

現時点で、筆者は、やはり大宰府外郭線の北部に位置する水城大堤と小水城群は、博多湾からみた正面であり、『日本書記』天智天皇 2 年（664）条の「対馬・壱岐・筑紫に防人と烽をおき、水城を築いた」という記事は、大宰府外郭線関連遺跡群の中での優先順位を示し、まず、水城を築造したものと考えている。

この水城大堤と小水城群、大野城跡・基肄城跡、そして、南側の前畑遺跡土塁状遺構、基肄城跡南東側の「とうれぎ土塁」と「関屋土塁」などの築造順序の詳細はわからないが、少なく



歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

とも前畑遺跡土塁状遺構はこれらのなかで遅れて築造され始めたのではないかと考えている。

筆者は、この10年ほど前から古代山城未完成説を提示している（亀田2014）。西日本各地の古代山城、特にいわゆる神籠石（こうごいし）系山城には未完成と考えざるを得ないものが多く、実際の築城における優先順位や、現実的な費用・人員などの不足によって未完成のまま止まってしまったものがあると考えている。

大野城跡や基肄城跡などいわゆる朝鮮式山城は基本的に完成し、大野城跡では修築の痕跡も見つかっている。つまり、大宰府外郭線関連遺跡群では水城大堤、大野城跡、基肄城跡は完成し、北部の小水城群は谷部・低地部の土塁は完成しているようである。ただ、その小水城群の横の丘陵上の土塁が本当に築かれたのかは検討が必要である。少なくとも春日市天神山水城跡の西側の丘陵上には天神山古墳（1号墳：墳長35mの前方後円墳、2号墳：円墳）がそのままきれいに残っている。発掘調査はなされておらず、築造時期など詳細は不明であるが、少なくとも7世紀後半の天神山水城跡より古いことは間違いなく、これらの古墳の墳丘が多少流出しているとしても、現在そのまま確認できるということは、この古墳の場所に天神山水城跡につながる外郭線土塁が築かれていなかったことは間違いないであろう。

つまり、大宰府外郭線は少なくとも完全に連結していないことは間違いなく、古代において水城大堤を中心とした途切れ途切れの小水城群の土塁、大野城跡・基肄城跡などの山城によって関連遺跡群が構成されていたものと推測される。

そこで、前畑遺跡土塁状遺構をどのように考えるかである。

筆者は、築造時期は水城大堤など北側の防御線よりは遅れたと考えている。出土土器で細かな前後関係は確認できないが、ひとまずそのように考えている。そして前畑遺跡の土塁状遺構の積み方は、水城大堤に比べていろいろな特徴を示しており、その多様さは、百済からの亡命貴族たちの指導のもと、国家、大宰府関連の人々の力を合わせて「版築土塁」を築いた水城大堤に比べて、やはり技術的な不十分さを反映しているのではないかと推測している。また、土塁状遺構が築かれた丘陵上での位置（占地・選地）は、百済や日本列島の典型的な古代山城の場合、尾根筋よりやや外側、少し下がったところに築かれるのが基本であると考えているが、前畑遺跡ではその位置がややずれているものがある。

筆者はこのような土塁状遺構の尾根との関係や多様な土塁状遺構の積み方、やや未熟な技術の人々も含めた、やや統一性に欠ける築造技術は、水城大堤などに比べて時間的に遅れて築造されたことを示しているのではないかと考えている。あわてて築き始めたので多様な技術の人々を動員して築き、このような多様性を持つ土塁になったとも考えられるが、一方で博多湾側に水城大堤があり、やはり、水城大堤が国家やのちの大宰府の技術力や人員を集めて、まず築かれ始めたと考えたほうが素直であろうと考えている。さらに、大宰府外郭線の南側に前畑遺跡、佐賀県関屋土塁・とうれぎ土塁以外に、明確な土塁が確認できていないことは、それらが



築造後に削られてしまった可能性も当然あるのではあるが、やはり、大宰府外郭線は全周していなかった、つまり未完成であったからではないかと考えている。そのような意識で百済の泗沘羅城をみると、同じように扶蘇山城から東側でしか確認できていない。この東側に羅城が築かれたのは、東側の新羅（北の高句麗も）を強く意識していたことによるのではないかと考えている。泗沘羅城の西側の土塁は当初から作る意識がなかったのか、それとも意識はあったが、諸般の事情で未完成に終わったのか、それは分からない。

大宰府外郭線も築造に優先順位があり、前畑遺跡が位置する南側はやや遅れて築造され始めたことで、現在確認できるような状態になっているのではないかと考えている。

大宰府外郭線の南側に位置する筑紫野市阿志岐山城跡（筑紫野市 2008・2011）は、この外郭線につながるのか、独立して機能したのかはわからないが、現時点では北側約 1/3 しか列石土塁線は確認されていない。筆者は阿志岐城山跡も未完成の可能性を考えている。

前畑遺跡や阿志岐山城跡の総合的な調査を今後期待しているが、現時点では、筆者は大宰府防御体制構築の優先順位などによって、現在のような様子になっているのではないかと考えている。

5. おわりに

以上、大宰府外郭線関連遺跡群の一部をなすと考えられている前畑遺跡の土塁状遺構をおもに百済の泗沘羅城などと比較検討してきた。

両者の類似点と相違点、これは百済地域の土塁・石塁などの多様な築造技術と日本列島の土塁・石塁築造技術が、百済からの亡命貴族たちの指導が大宰府外郭線関連遺跡群の土塁などにそのまま反映されたのか、それとも日本列島にそれ以前にもたらされ、培われた土塁構築技術も含めて築造されたことでこのような形になったのか、筆者には現時点ではよくわからないが、少なくとも前畑遺跡の土塁状遺構の築造技術の多様さはまさに当時の両地域の土木技術の多様さと構築体制のあり方を教えてくれているものと考えている（亀田 2021）。

小稿をなすにあたり、小鹿野亮館長、海出淳平氏を始め、筑紫野市教育委員会のみなさん方には多くのことをご教示いただいた。末筆ながら記して謝意を表したい。

〔参考文献〕（五十音順）（中国語・韓国語は日本語読みにして並べた）

相原嘉之 2004「倭京の“守り”—古代都市 飛鳥の防衛システム構想—」『明日香村文化財調査研究紀要』4、明日香村教育委員会文化財課、69-90

青木敬 2017『土木技術の古代史』歴史文化ライブラリー 453、吉川弘文館

赤司善彦 2023「(6) 東アジアの外郭線」九州歴史資料館（進村真之）編『大宰府外郭線Ⅰ』193-205

秋山日出雄 1984「南朝都城「建康」の復原序説」榎原考古学研究所編『榎原考古学研究所論集第七』吉川弘文



歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

東潮・田中俊明 1989『韓国の古代遺跡 2 百済・伽耶篇』中央公論社

東潮・田中俊明 1995『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社

大阪府立狭山池博物館（久永雅宏）編 2021『大阪府立狭山池博物館開館 20 周年記念令和 3 年度特別展 狭山池のルーツ—古代東アジアのため池と土木技術—』

小鹿野亮・海出淳平・柳智子 2017「筑紫野市前畑遺跡の土塁状遺構について」『第 9 回西海道古代官衙研究会資料集「新発見の古代の土塁を考察する」（筑紫野市前畑遺跡の検討）』古代山城研究会・西海道古代官衙研究会合同研究会、1-30

鏡山猛 1968『大宰府都城の研究』風間書房

亀田修一 2014「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ—論考編 1—』熊本県教育委員会、17-40

亀田修一 2021「古代山城と地域社会—備中鬼ノ城を中心として—」熊本県教育委員会編『令和 2 年度（2020 年度）鞠智城座談会 地域社会からみた鞠智城』17-31

亀田修一 2023「(8) 大宰府外郭線土塁に関する覚書—扶余羅城との比較—」九州歴史資料館（進村真之）編『大宰府外郭線Ⅰ』223-230

九州歴史資料館（進村真之）編 2023『大宰府外郭線Ⅰ』

百済古都文化財団編 2018『扶余羅城東羅城Ⅳ—陵山里山区間 雉・城壁—』（財）百済古都文化財団発掘調査研究報告 69（韓国）

新宮学 2011「中国近世における羅城—明代南京の京城と外郭城の場合—」橋本義則編『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会、3-22

成懸華 2022「扶余羅城の築造技法検討」『韓国城郭学会 20 年の研究成果集成』韓国城郭学会、77-103（韓国）

妹尾達彦 2011「隋唐長安城の皇室庭園」橋本義則編『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会、269-329

妹尾達彦 2014「Ⅲ. 最新都城調査・研究成果 02 東アジアの都城と宮苑構造—7～8 世紀を中心に—」『古代東アジア都城と益山 王宮城（下）』国立扶余文化財研究所、24-69（韓国）

田中俊明 2011「古代朝鮮における羅城の成立」『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会、23-41

筑紫野市教育委員会（草場啓一）編 2008『阿志岐城跡—阿志岐城跡確認調査報告書（旧称宮地岳古代山城跡）』筑紫野市文化財調査報告書 92

筑紫野市教育委員会（草場啓一）編 2011『阿志岐城跡Ⅱ—阿志岐城跡確認調査報告書総括編—』筑紫野市文化財調査報告書 104

筑紫野市教育委員会（海出淳平）編 2020『前畑遺跡第 13 次発掘調査—土塁状遺構の発掘調査—』筑紫野市文化財調査報告書 121

筑紫野市教育委員会（小鹿野亮・川口陽子）編 2021『前畑遺跡—重要遺跡確認調査—』筑紫野市文化財調査報告書 122

忠南大学校百済研究所編 2000『百済泗沘羅城Ⅱ—整備復元のための東羅城区間断面切開調査—』忠南大学校百済研究所学術研究叢書 3（韓国）

潘谷西主編 2001『中国古代建築史』4、中国建設工業出版社（中国）

朴淳發 2011「泗沘都城研究の現段階」橋本義則編『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会、42-68

楊国慶・王志高 2008『南京城牆志』鳳凰出版社（中国）





図 1-1 大宰府外郭線想定図
(小鹿野・海出・柳 2017 一部改変)



図 1-2 筑紫野市前畑遺跡第 1 トレンチ南壁土塁状遺構 (180115：亀田撮影)



図 1-3 筑紫野市前畑遺跡第 1 トレンチ
南壁土塊積み (180115：亀田撮影)

図 1 大宰府外郭線と前畑遺跡



図 2-1 西安・隋大興城 (583～618 年) (1/250,000)
 (妹尾達彦 2011 一部改変)



図 2-2 南京・南朝建康城 (縮尺不明)
 (赤司 2023 一部改変・原典楊・王 2008)

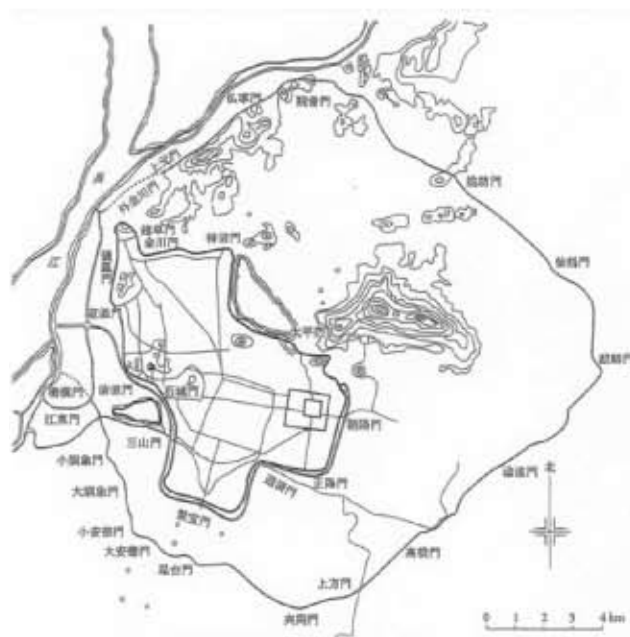


図 2-3 南京・明南京外郊図 (1/250,000)
 (新宮 2011 一部改変・原典潘谷西 2001)



図 2-4 高句麗長安城 [平壤城] (1/70,000)
 (東・田中 1995 一部改変)



図 3-1 百済泗沘羅城城壁線 (1/75,000)
 (成懸華 2022 一部改変)

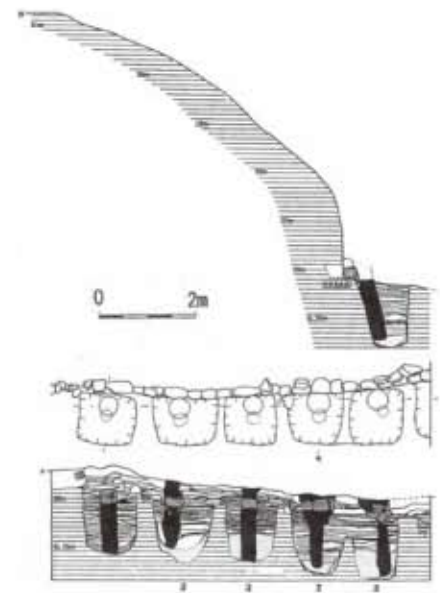


図 3-2 百済泗沘羅城東門跡土塁・石垣
 前面柱穴群 (1/150)
 (忠南大学校百済研究所 2000 一部改変)

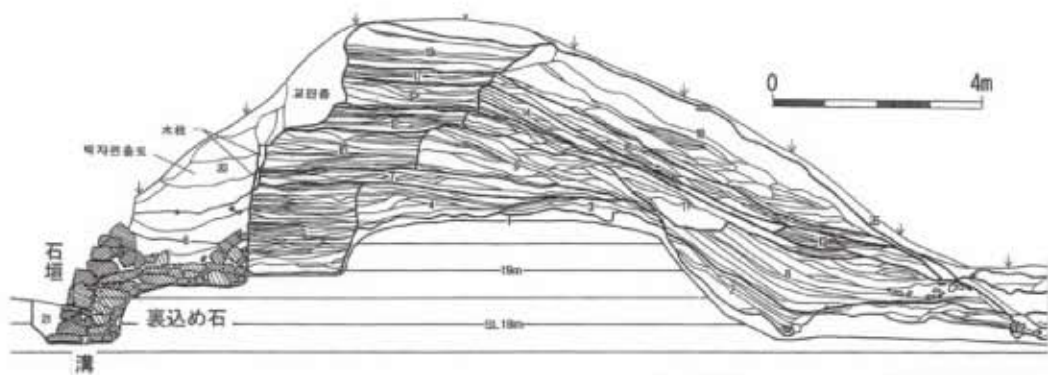


図 3-3 百済泗沘羅城東門跡南側土塁・石垣断面図 (1/130) (忠南大学校百済研究所 2000 一部改変)

図 3-4 百済泗沘羅城東門跡南側
 土塁前面敷粗朶 (北より)
 (1991年12月11日亀田撮影)

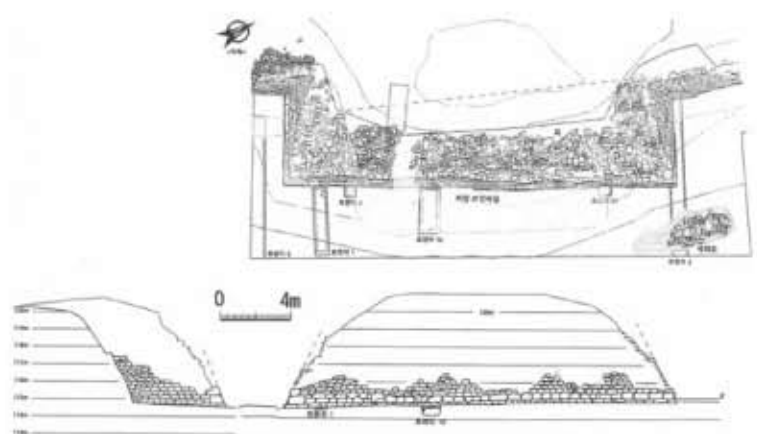


図 3-5 百済泗沘羅城東羅城雉城 (1/400)
 (百済古都文化財団 2018 一部改変)

古代大宰府と前畑遺跡

佐藤 信

1. はじめに

筑紫野市の前畑遺跡は、2025年3月10日に国史跡に指定された。国指定史跡は、「わが国の歴史の正しい理解のために欠くことができず、かつその遺跡の規模、遺構、出土遺物等において、学術上価値ある」遺跡が文化財保護審議会の答申を経て指定される。旧石器時代から現代まで、北海道から沖縄までの国指定史跡は、1,900件ほどになる。

史跡に指定された遺跡は、調査・研究により確認された歴史的・学術的価値を発信しながら、良好な状態のまま後世へ伝えることが必要となる。調査・研究を進めて歴史的・学術的価値を高めるとともに、史跡指定地の公有化などを進めて保存・整備・活用を行って史跡公園として市民・国民に提供することがめざされる場合もある。

2. 前畑遺跡

前畑遺跡は、大宰府中枢部の南東方の丘陵上に、自然地形の高まりを活かしながら長さ558m以上にわたって築かれた人工の土塁状遺構である。時代的には、7世紀中～9世紀後期に機能したと考えられている。大宰府中枢の施設を広域に取り囲んで守る外郭施設として、山城である北の大野城、南の基肄城、東南の阿志岐山城や北方の水城・小水城などとともに、南方のとうれぎ土塁・関屋土塁ともつながる機能を果たした大規模な遺跡として、貴重な遺構といえる。

大宰府をとりまく周囲の丘陵上の自然地形を利用し、土地を削り出したり、平坦にして版築するなどして土塁状の高まりを廻らせた大規模な遺構であり、国家的に築かれた構造物と評価される。北の博多湾の福岡平野側と南の有明海の筑後平野側をつなぐ囲郭状施設の南方の外郭防御線として機能したと考えられる。

大宰府都城の南方を守る施設には、北方の水城・小水城と同様な施設として、平野部にとうれぎ土塁・関屋土塁などがすでに知られているが、前畑遺跡は南方の丘陵上に延びる土塁状施設として平地部土塁と連携して大宰府を広域に取り囲む施設である。大宰府へと進入する南からの交通路に対面する役割も果たしたと思われる。大宰府に向かう正面としては、北方の博多湾側からと同様に、南方の有明海側からも進入口があることから、南からの外敵の侵入コースに対する防御施設として、前畑遺跡も評価される。



3. 大宰府をとりまく外郭

前畑遺跡は、都府楼（大宰府政庁）など大宰府の中枢部を取り囲み、北の大野城、南西の基肄城、南東の阿志岐山城などの山城群、北方博多湾から進んでくるコースをふさぐ水城・小水城などの防御施設とともに、大宰府都城を広域に取り囲む外郭施設として機能したと考えられる。

大宰府の府郭を広域に取り囲む「羅城」施設を推測した阿部義平氏の説では、前畑遺跡の位置そのままではないが、広域な羅城ラインが展開したと推測している。これまで、日本古代の都城では藤原京・平城京・平安京にも羅城は存在しないと評価されてきたことから、日本古代には羅城はなかったと考えられてきた。しかし、阿部義平氏は、飛鳥京にも丘陵尾根線をつなぐ形で羅城ラインが展開したと推測し、大宰府においても丘陵尾根状地形をつなぐ形で広域の羅城の存在を推測したのであった。

古代朝鮮半島において、百濟最後の王都扶余の発掘調査によって、大河錦江の南に沿った扶蘇山城とその南面の王宮を中心とした扶余の都を取り囲むように、羅城の土塁・石垣・門・堀が巡っていることが明らかになっている。660年に唐・新羅連合軍によって陥落した百濟王都扶余における羅城の存在は、示唆的である。

663年の白村江の敗戦を受けて日本列島に渡ってきた百濟復興勢力の王族・貴族のうち、亡命百濟將軍たちの指導のもとに大宰府を守る大野城や基肄城の古代山城が築かれたとする『日本書紀』の記事にみられるように、百濟系の軍事的・技術的な影響のもとに大宰府防衛施設が構想されたことは十分に考えられる。水城の発掘調査成果でも、版築、敷粗朶や柱の埋め殺し工法などに、半島・百濟系の技術が確認されている。

そうした一環として、大宰府府郭を広域に取り囲む羅城の計画が採り入れられる可能性はあり得るかもしれない。ただし、大宰府の羅城については、その全貌の確実な遺構は明確ではなく、なお調査・検討を続ける必要がある。

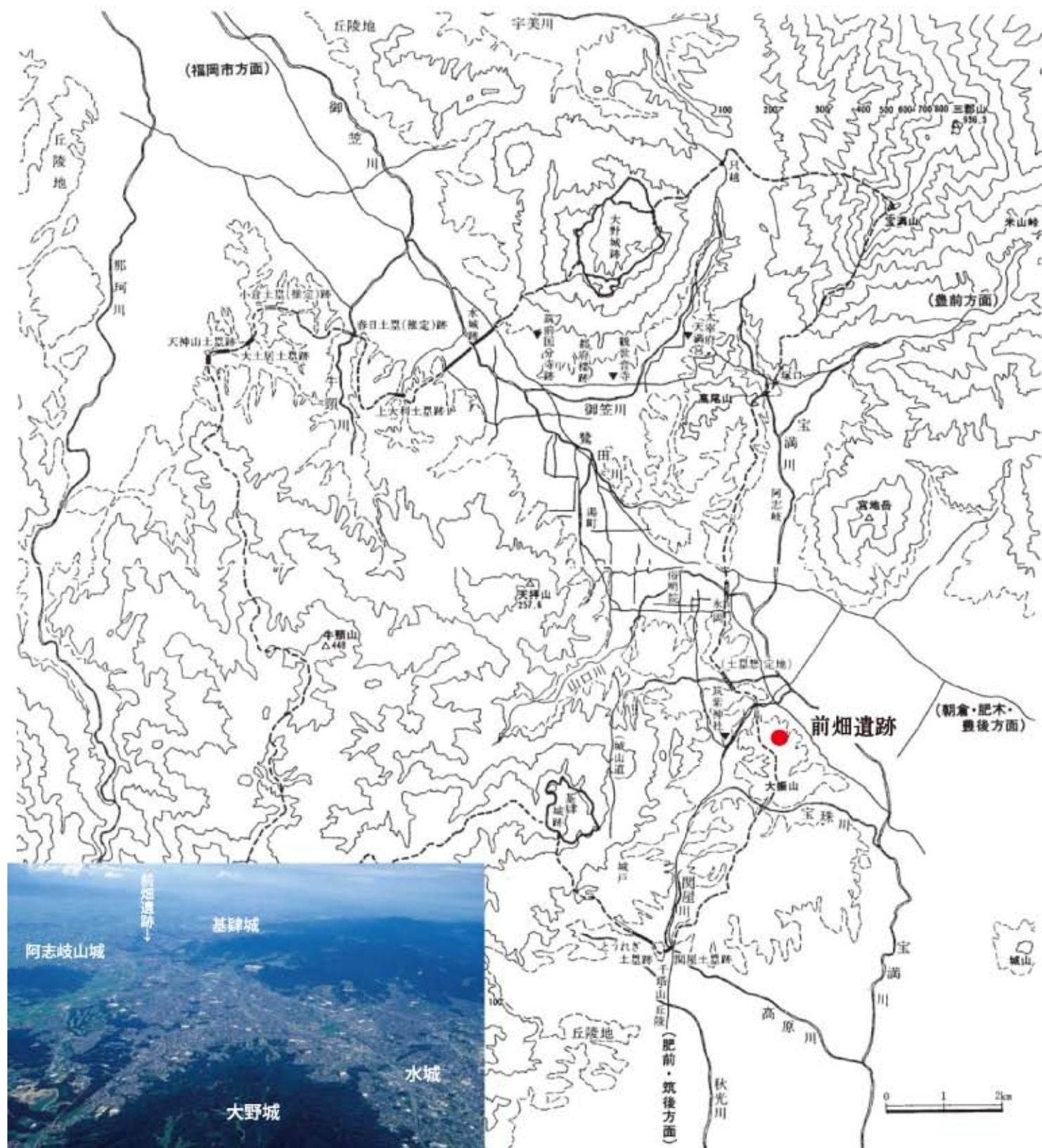
前畑遺跡も、それにつながる土塁状遺構の位置や構造そして伴出遺物などによって、さらに遺跡のあり方が解明されることを期待したい。

4. おわりに

大宰府を守るための大野城・基肄城・阿志岐山城などの古代山城やそれにつながる水城・小水城などは、663年の白村江の敗戦を受けて築かれた。大宰府南方にも、とうれぎ土塁・関屋土塁などの土塁とともに、丘陵尾根を利用した土塁状遺構として前畑遺跡などが長く延びている様子が知られた。博多湾側のみでなく有明海側においても、こうした大宰府を広域に取り囲む土塁状遺構が存在することは、羅城とまで言えないかもしれないが、国際的緊張のもとで大宰府郭やそれに接続する交通路を守る施設としての性格があった可能性がある。



国史跡指定記念 古代史トークセッション in 筑紫野
歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～



かつて阿部義平氏によって提唱された大宰府周辺の
 地形と羅城復原図（前畑遺跡の位置を加筆。）

阿部義平 1991「日本列島における都城形成—大宰府羅城の復原を中心に—」
 『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集

大宰府遠景
 （大野城跡上空から南方を望む）



国史跡指定記念 古代史トークセッション in 筑紫野
歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

[参考文献]

九州歴史資料館 2023 『大宰府外郭線調査研究報告 I』

筑紫野市教育委員会 2020 『前畑遺跡第 13 次発掘調査 土塁状遺構の発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第 121 集

筑紫野市教育委員会 2021 『前畑遺跡重要遺跡確認調査』筑紫野市文化財調査報告書第 122 集



前畑遺跡をとりまく大宰府関連遺跡



大宰府政庁跡 (南方を望む)
(筑紫野市観光協会提供)



水城跡 (太宰府・筑紫野方面を望む)



阿志岐山城跡第3水門石塁



基肄城跡東北門の礎石 (唐居敷)



古代大宰府空間地図



前畑遺跡の土塁状遺構

前畑遺跡の土塁状遺構の発見は、これまでの古代大宰府の空間概念を根底から再考する契機となりました。古代官衙と推定されていた岡田地区遺跡は、その境界性という意味でその可能性がさらに高まり、また、『万葉集』の送別宴が行われたとされる蘆城駅家の候補地である御笠地区遺跡は、その東方の宮地岳にある阿志岐山城跡とセットで考えるべき遺跡と見られるようになりました。大宰府をとりまく山々は、大宰府と外界とを画する広義の外郭線としての意味を持っており、そのことを示しているのが前畑遺跡の土塁状遺構なのです。



前畑遺跡遠景（北西から）



前畑遺跡の土塁状遺構

前畑遺跡における土塁状遺構の発掘調査では、これまでに考えられていた単純な版築工法だけではなく、多様で高度な土木技術が古代に存在していることが確認されました。古代山城の土塁や水城・小水城などの築堤にも、花崗岩由来の礫を意図的に混入していたり、加水して混ぜたような地層の様子、地層が波打っていたり、黒褐色土の塊状の盛り土などが見られ、他の遺跡の古代の盛り土にも、前畑遺跡に共通する土工の要素があって、選択的に用いられていることが分かってきました。

古代の盛り土における多様性



大野城跡北石垣付近



大野城跡北石垣付近



大野城跡増長天南城門付近



阿志岐山城跡第12トレンチ



大土居小水城（山村仙樂氏提供）



天神山小水城

層状積み土の分層

高度なテクノロジーで築かれた土壁
～現代へ通じる世界的な技術、その多様性～

土塁状遺構

前畑遺跡の土塁状遺構は、7世紀中頃～9世紀後半頃にかけて機能した大規模な土木構造物で、従来考えられていたよりも、多様な土木技術が採用されていました。また、それは地形や地質によって選択されているようで、とても高度な技術を選択して用いていることが分かりました。

前畑遺跡は、今後の古代土木構造物の調査研究に重要な意味を持つ遺跡であることが評価されています。